

あたしは花も恥じらうお年頃である、××歳のサキュバス。

ヒトからしたら結構な年かもしれないが、長命なサキュバスとしてはまだまだひよっこだ。

そんなサキュバスの食事は、男の精気または精液だ。

精気というのは性的興奮や刺激によって体から放出されるもので、精液は言わずもがなである。

対象はヒト型の生物。なので人間、獣人、サキュバスの男版であるインキュバスなど、そこら辺の種族がお食事提供者になる。

同族に近いインキュバスにはあまり食指が動かないが——まあ、背に腹は代えられない時もあったりする。

「……はあ」

そう、今のうちに。

時刻は昼過ぎ。場所はアパートの一室。

ワンルームではあるが、ピンクと黒で統一した自分好みの自宅だ。あたしは八畳の空間で、デデーンと存在感を主張しているピンクのダブルベッドに腰掛けていた。

足を組み、片肘をついて。うんうんと悩んでいるのだ。

お腹が空いたのである。それはそれはもう、ペコペコだ。

でも最近はあまり良いご飯男にありつけていなくて。しかもどいつもこいつも、どんなに悦くしてやっても大体一ヶ月ほどで「もういい」と逃げ出すのだ。

サキュバスは唯一の相手を見つけるとその相手を伴侶とみなす。

そしてその相手からのみ、食事を貰うことになる。そんな習性があった。

もしそんな相手がいれば、こうして空腹に喘ぐこともなくなるだ

ろう。しかしあたしにはどうやら、実現は不可能なようであった。

基本的に人間の男からしか食事をしないのだが、本当に肉体しか求められないのだ。

そしてそんな相手は散々あたしで性欲を発散しておきながら、他所で恋人を作っていたりもする。

（でも獣人はお食事を貰うイコール交際だし、重いし……）

あたしにはこれまでに三人ほど、獣人のお食事提供者がいた。

だが彼らは皆——本当に三人全員が、あたしに激重感情を向けて強制的に番おうとしてきたのだ。

全然別のタイミングで付き合った人達だったのに、お別れを告げた後の行動も丸つきり一緒に。連絡先をブロックしただけでは足りず、引っ越しをする羽目になった。

引っ越し後も知り合いから「獣人男性が貴女を探してたよ」と言

われて、何度青褪めたことか。

そんな怖い経験をしたため、あたしはもう絶対に、獣人にだけは手を出さないと決めている。

だから今では、人間からのみご飯をもらっていた。

そしてその結果が、このざまだ。ああお腹が減った。

「ごはん……ごはん……」

あたしは枕元に置いてあるスマートフォンを手に取り、ベッドへ俯せになった。

慣れた手付きでマッチングアプリを開き、いい人いないかなと探す。

ここで先月捕まえた人間の男は、一週間前に突然別れを告げてきた。好きな人が出来たとのたまって、去っていったのだ。

あんなにあたしの中で気持ち良さそうに出していたのに、本命が

出来たらこうもアツサリと捨てるのだ。まったく、許せない。

「あーんもう、どれもこれもちがーう。早くごはんほしいよお」

探すのが億劫になったあたしは、パタリとベッドに倒れ伏す。

そしてシーツに顔を埋めて、うーっと唸った。

街でそこら辺の男をテキトーに引っかけてもいいのだが、その男が妻帯者であった場合は後日訴えられる可能性がある。そうなったら大変だし面倒だ。

性に奔放なサキュバスでも、今の時代ではある程度の節度を持つて生きなければならぬ。

五百年も前であれば好き放題だったと耳にした時には、その時代に生まれたかったと心底思ったものだ。

あたしは息苦しさを感じて、シーツから顔を上げた。そして俯せのまま寝台に肘を突くと、再びスマートフォンに目を向ける。

そこに映るのは、パツとしない好みとかけ離れた男達。空腹のお腹が、くうと鳴る。

つまんないとも思う。これなら獣人の誰かと番っていた方が良かったのだろうかと考えるが——そんな選択をすれば、あたしの未来に自由の文字はなかっただろう。

「——こうなったら」

動きの鈍い思考が、普段と違う刺激を求めてとあるサービスを思い浮かべた。

（気は進まないけど……。やって、みようかな）

マッチングアプリを閉じて、ブラウザを起動する。

検索欄には、『女性用風俗』と入力。エイツと虫眼鏡マークをタップすると、画面にはズラツと沢山の文字が並んだ。

一番上にあるのは、あたしでも聞いたことがあるくらい有名な、

インキュバス派遣サービス店だ。

「うう、インキュバス……でも背に腹は代えられない……」

インキュバスは、あたし達サキュバスと同じくヒト型の異性から精気や体液を食事として頂戴する種族だ。

獣人や人間より、圧倒的に性に奔放なのである。

だからお願いをすれば、無駄な前置きもなくサクツとご飯を提供してくれるだろう。

それがあちらにとっての、食事にもなるのだから。

そんなインキュバスだが、あちらもあちらで伴侶を定めて番とすることがある。

『だからインキュバスとサキュバスは、昔からいーっぱい番が出来るのよね』と言っていたのは故郷のベテランサキュバスだ。

互いを伴侶と認めればお互いにご飯の提供が出来て最高にハッピー

ーなのだとか。

まあしかし、特定の相手がいなければサキュバス同様に、不特定多数と関係を持つなど日常茶飯事な種族だ。

だからこういうお店で働いている。もちろんサキュバスも、男性向けのお店で働いている子が多い。

「確かーちゃんは、やばい時にここの姉妹店のお店を利用したんだっけ……？ 利用して良かったって、食わず嫌いだったって言うってたような」

同族の友人のキラキラした笑顔を思い出す。

結局それからインキュバスのお店にドはまりした彼女は、担当の指定までして頻繁に通い詰めているらしい。

あんたも一度使ってみな。天国みれるよ♡と言われたが、今は腹を満たせる天国が見たい。



「……………あ。この人、好みかも……………」

インキュバスもサキュバスも、異性を誘惑してご飯にありつかなければならぬ。

だから大体の者が美形であるのだが——あたしは何となく眺めていたセラピスト紹介画像に、好みの男性を見つけた。

もちろんそれは食指が動かないインキュバスであるのだが、この人なら有りかもしれないと思えてくる。

真っ白な髪はサイドのみが鎖骨につくほど長く、その後ろは後ろ下がりボブのような形をしている。

少しつり目がちな赤い瞳と、高い鼻梁。

神秘的でありながらどこか酷薄そうな雰囲気が非常にグッドだ。

普段食べている人間には無い美貌に、画面越しでもドキリとする。

「で、でもお。こーんな素敵なお人ならきつと、予約がびっしりなん

でしょお??」

へ、へえ、電話だけじゃなくてネット予約も出来るんだ……? なんて思いながら、あたしはそのネストさんの予約状況を確認する。

「えっ、めちゃくちや空いてる。いや、寧ろ予約ゼロ? 何故……?」  
こんなに素敵なのに……? と首を傾げたあたしは、ついタチタチと指で操作して。

「三時間……いや、六時間……イヤッ」

時間が短ければ短いほど料金は安く済む。だが、『おすすめは十二時間から二十四時間!』の宣伝文句がやたらと目につく。

二十四時間――

もちろんぶっ続けで致すわけではないのだろうが、もしそれだけの時間をかけてご飯を貰えたら、当分餓えなくて済む。それに今は飢餓感が強くて、とにかく精気のドカ食いがしたかった。

「へ、へえ？ 長時間になればなるほど、割引率も大きいんだー？」  
いけないあたしの手は、ついタシツと二十四時間の、『番墮ちプラン♡』を選択してしまった。

「し……刺激的で面白そうな体験プランだし……♡何事も、経験よねっ♡」

幸い、お金なら沢山ある。

ふたり前のご飯提供者が、使わないのにお小遣いを死ぬほどくれたのだ。

その人も結局本命が出来たと離れていったのだが、別れの際には手切れ金だとまた、たんまりと金銭をくれた。

そのの一部を使って、決済する。

自分の写真を送る必要があったのは謎であったが、最高に可愛く自撮りして送っておいた。そうして無事に、予約は済んだ。

「三時間後に到着かー！楽しみーっ♡♡」

ホテル指定でも待ち合わせでもなくこの自宅に来てもらうようにしたので、あたしがすることと言えばシャワーを浴びて軽くお化粧をするだけだ。

エツチの時はゴテゴテに顔を盛るのではなく、ナチュラルメイクにした方がウケがいい。

それを思い出してどういうメイクにしようかなーと鼻唄を歌いながら、あたしはご機嫌でお風呂場に向かった。

脱衣所に入る直前、スマホがメールの受信音を発していたが――  
予約確認メールかなと思い、あたしはすぐにそれを忘れてしまった。

\* \* \*

ピンポーンとチャイムが鳴って、あたしは「はい！」と元気良く応えた。

八畳のワンルームだ。ベッドの上から返事をして、玄関まで届く。あたしはペタペタとスリッパを鳴らしながら、ご機嫌で玄関まで歩いていった。

「こんにちは、ご予約いただいたインキュバスのネストです」  
「あらっ♡ご丁寧にどうもお♡♡」

こちらにも名乗って、ささどうぞっ♡と宣材写真以上に素敵なおネストさんを招き入れる。

男性を前にして自然と媚び媚びモードになってしまったが、彼は気にしていない様子だ。軽くお辞儀して中に足を踏み入れる。

「うふふっ♡来てくれて嬉しいですよ♡あたし、サキュバスなんですよ、もうお腹がぺこぺこで♡♡」

「そうなんですネ」

靴を脱いで室内に上がったネストさんは、パチリと瞬いて頷いた。しかしそれにしても、表情が変わらない。

写真では微笑んでいたのだが、今は無表情だ。

「あのお、敬語じゃなくて、もっと気軽に話してほしいなーって♡恋人みたいに接してほしいですよ♡♡」

「うん、わかった」

顔の前で指を組み、しなをつくって甘えるが、彼の表情は変わらない。

それにあたしがあれえ？と首を傾げていると、ネストさんは一歩こちらに足を踏み出した。

「ただいま、会いたかったよ」

「お……ッ♡♡」

突然強く搔き抱かれて、あたしは左耳の傍で色気たつぷりに囁かれる。そして次に、耳朶をねつとりと舐め上げられた。

「あ、おお、耳い……っ♡」

数回周りをなぞるように舐められたあと、耳孔ににゅぷりと舌先を振じ込まれる。そうしてあたしは、耳孔をじつくりとほじくられ始めた。

「お預けが辛くて切ないおまんこに、今日もたつぷり種付けしてあげるからね。奥まで念入りに精液を塗り付けて、孕ませてあげる」

「あ、あ、アッ」

両手で尻臀を鷺掴みにされ、いやらしい手付きで揉まれる。

キュンキュンと甘く痺れる下腹部には、硬いものが押し当てられ

ていた。

「インキュバスの極太つよつよおちんぽで、淫乱サキュバスのおまんこを屈服させるんだよ。楽しみにしててね」

「おお、お……♡♡極太、おちんぽおっ♡♡」

ピッチリと肌に密着しているショートパンツ越しに、スリスリとお尻の穴を撫でられている。

逞しい男性器を求める前の穴はすでに、グズグズに蕩けていた。

「さあ、ベッドに行こう？ 君が満足するまで——いや、俺が満足するまで、付き合って貰うよ」

「ひゃ、ひゃい……っ♡」

覗き込むようにこちらを見たネストさんは、蕩けるように甘く笑っていた。

どうやらこの人は、普段は無表情でも、スイッチが入るととんで



もない甘々彼氏になるようだ。

（も、もう既に虜になりそう……♡）

腰を抱かれてベッドに向かいつつも、右耳を念入りに舌でほじくられる。

インキュバスの舌は長さや細さを自在に変えられると聞いていたが、本当のようだ。耳の中で彼の舌が暴れて、穴を犯している。

「先に脱ぐね？」

「は、はひいつ♡♡」

トントンと服の上から下腹部——しかも子宮の丁度上の辺りを叩いて。ネストさんは身に付けている衣服を脱いでいった。

下着まで躊躇いなく脱ぎ、彫刻のように美しい裸体を曝す。

それからこちらに手を伸ばし、あたしが身につけている布面積の少ない服を剥いでいった。

「へえ、淫紋。エッチだね」

「あ、うんっ♡精液を注がれるとね、ほんのりと発光するの♡」

これがあると大抵の男は喜ぶため、魔法で刻んでいる。

感度も上がるため、どんな下手くそが相手でも気持ち良くなれて助かっていた。

「ふうん、そっか。いいね。俺の淫紋もここに重ねちゃおうかな？」

「……えっ？……あ、あははー」

無表情で冗談を言われても、困ってしまう。

だってインキュバスが他人に淫紋を刻むのは、相手を伴侶とする時だけだ。そんな軽々しく「伴侶にしちやおうかな♡」みたいなことを言わないでほしい。

それに淫紋を重ねがけだなんて。流石のサキュバスでも、感度が上がりすぎておかしくなってしまうそうだ。

「ベッドに仰向けになつてくれる？ おまんこ舐めたいな」

「あ、うんっ♡お願いねっ♡」

お腹が空いているのは確かだが、初めてのぞ奉仕にドキドキする。おしゃぶりも手コキもお手のものだが、クンニをされた経験は一度もない。

そんなのはお腹の足しにならないと突っぱねてきたのだが、相手がインキュバスなら話は別だ。あちらにも食事をする必要があるのだから、クンニも甘んじて受け入れる必要があるだろう。

「いただきます……♡」

「はい、召し上が——れッ!？」

にゆるん、と割れ目を撫でた柔らかな舌が——ズロンッ♡と膣内に割り入った。

いきなり熱いものを無遠慮に、物凄い勢いで振じ込まれたのだ。

「えっ!? あ、おッ♡おッ!?♡♡」

耳の穴をほじくっていた時と、比にならないほどの太さと、長さ。それがどんどん奥を目指して突き進み、あっという間に行き止まりに到達した。

「――あああんッ!」

「ふ……っ♡」

ぬろおっ♡と舌先で舐め上げられたのは、子宮の下側、ポルチオだ。いきなりそんな深部まで探られるとは思っていなかったあたしは、目を白黒させながら彼の整った顔立ちを見つめる。

ぬぢ、ぬぢ……♡

一部分がぼこりと太くなった舌が、浅いところをゴリゴリと抉る。

「ひ、ぎ……ッ♡♡」

「んんー♡♡」

ゴリゴリ♡ペロペロ♡じゅぶじゅぶ♡

ねっとりポルチオを舐められながら、Gスポットを抉られる。

「フーツ♡ふぐっ♡お、おーッ!! おおお〜ッ♡♡」

一気に蜜の量を増やした膣内が、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜられている。予想だになかった突然の大きすぎる悦楽。淫らな体だけは、勝手に順応していく。

「あうう〜っ♡♡♡」

混乱する思考を置き去りにして、体は性に奔放なサキユバスらしくあつさりと達してしまった。

ビクビクと体を痙攣させていると、股の間からクスリと笑う声が聞こえてきた。

「はっ♡さきゅばすまんこ、よわ……♡」

「うう……! よわく、ないもんっ♡」

膨れ上がった部分でGスポをゴリゴリ♡

太い舌で満遍なく膣内をぞりゆぞりゆ♡

達しても構わず激しく責め立てられて、あたしはぶしゃりっ♡と潮を吹いてしまった。

「ざっこお♡♡よわすぎ♡♡」

「ちあうもんっ！あ、おっ♡♡よく、ないもんっ♡♡」

インキュバスの舌ちんぽで、あたしのおまんこはズンズンと突かれている。ポルチオだってペロペロと舐められっぱなしだ。

小さな子宮口すら、時折くすぐられている。

「淫紋、とっ♡あなたの体液の、相乗効果でえっ♡♡感じやすくなってる、ただかもんっ♡♡」

今になって思い出したが、インキュバスの体液には催淫効果がある。だからあたしが雑魚なわけじゃないと弁明するが――